東南アジアに於ける中華街の研究

－檳城の街巷名と家屋形態の関連について②－

藤　島　範　孝

4

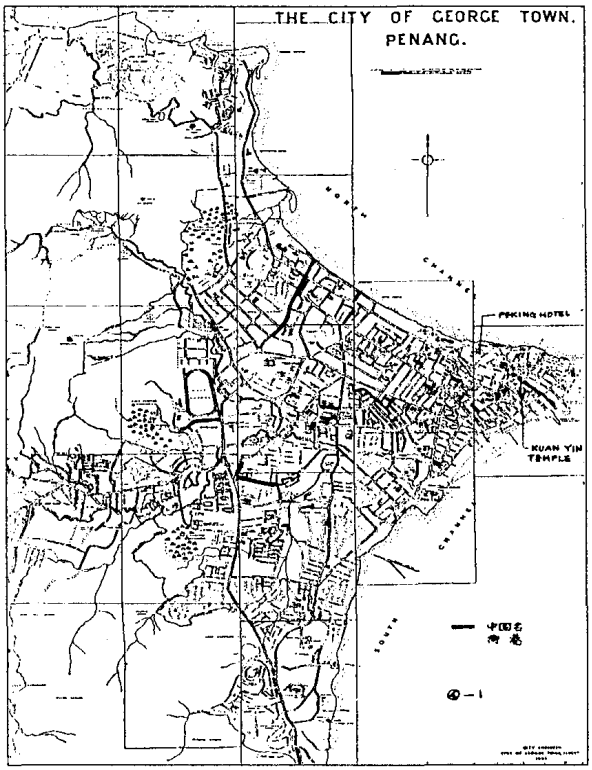
マレーシア政府のブミプトラ政策が実施されて英語、中国語、（主として広東語と閩南語）インド語系は社会の表通りから消滅することになった。中国語も中国人仲間での会話のみに限定された。中国語表記の華僑新聞も夜間に発売されるようになった。多層的民族国家で頂点にマレー人がいる限り低層にいる民族の言語の自由は制限された。これは、マレーシアの国家形成の歴史とも深くかかわっている。[①] 然し、中国人社会の特性である同族、同郷、同業の構造は固有の習俗として定着している。子弟の教育も中国語で行い、地名や街巷名についても中国語表示を採用教育している。各種の教科書には漢字表記を採用している。例えば馬來亜(Malaya).馬來西亜(Federatiok).沙巴(Sabah).砂**勝**越(Sarawak).雪蘭莪(Selangor).柔佛(Johore).馬六甲(Malacca).森美蘭(Negri Sembilan)等と表示している。マレー語に漢字を当嵌めたものである。漢字は繁体字である。更に、檳城の如きは英語やインド系言語の地名も漢字体で表現することとなり、発音を漢字にするものや直訳したり意訳したりするものを漢字で表現するといった多様さも示している。中国人の仲間ではマレー語地名や英語地名とは別に中国語による地名、街巷名を用いる。整理区分すると次の様になる。a)都市名のジョージタウンがPenangとなり、檳城とする。首都のKual Lumpurは吉隆坡市である。亦、Jalan Rajaを拉惹街としてマレー語に漢字を当てたもの、b)Cambeell Rdを金馬路、Weld Rdを衛路、Cross Stを哥洛

士街とする英語を音訳化したもの、c)Station Stを火車站路、Church Stを教堂街、Garden Rdを公園路とするように英語を意訳化したもの、d)観音(天后)通りをCannon Hole St,潮州街をTeochew Stとするように中国語の原語を英語化したもの、e)地図表示とは全く関係なく独自の街巷名を中国語にて命名したもの、例えばBeach StがDatijieで打鉄街、Bisop StがQimujieで漆木街、Kimberly StがMianxjanjieで麺線街となっている。但し、中国人のみの通用である。檳城のでは中国式表示そのものが、非合法であるから公式の地図はない。然し、中国系の新聞では専ら中国語特有の街巷名を用いている。

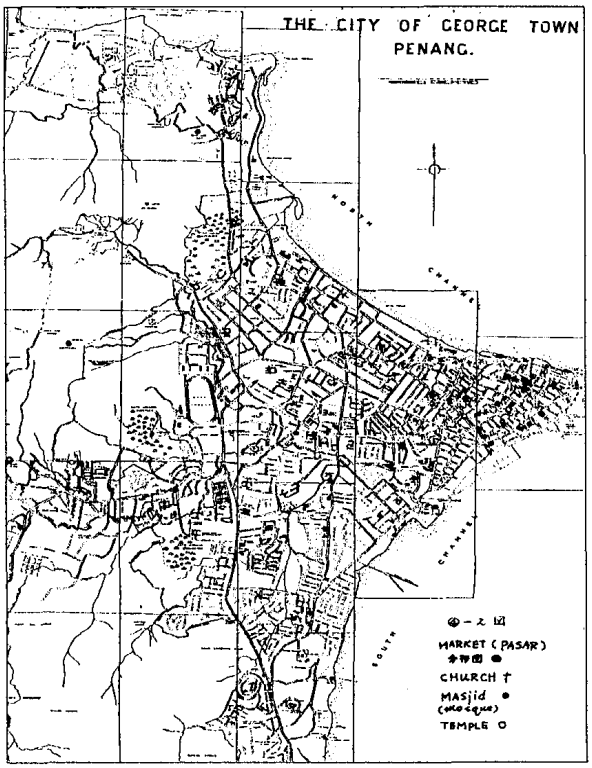
檳城では中国語を原語とする街港名がいくつか残っている。漢字表現しなければ合法なのである。例えば、ｲ)Lorong Amoy(厦門)②.ﾛ)Get Lebrh Cina.Lebuh Cina(中国)③.ﾊ)Jalan Cantonmet.Pesiaran Cantonment.Jalan Batu Gantong④(広東人、広東).ﾆ)Lebuh Hong Kong(香港).ﾎ)Jalan Nonking(南京).ﾍ)Jalan Nanning(南寧).ﾄ)Lorong Swatow（汕頭）などがある。亦、中国人の居住者名が街巷名になったものもある。例えば、ｲ)Jalan Chow They.ﾛ)Jalan C.Y.Choy.ﾊ)Jalan Goh Guan HO.ﾆ)Jalan Han chiang.ﾎ)Jalan Kek Chuan.ﾍ)Jalan Lim Chin Guan.ﾄ)Jalan Lim Eow Thoon.ﾁ)Jalan Lim Mah Chye.ﾘ)Lorong Lim Cheng Teik.ﾘ)Lebuh Ong Chong Keng.ﾇ)Jalan Phee Choon.ﾙ)Jalan Seang Teik.ｵ)Lorong Sek Chuan.ﾜ)Jalan Tanlu Ghee.ｶ)Jalan Tye Kee Yoon.ﾖ)Lebuh Tye Sin等がそれである。これら中国語に原名を持つと思われる街巷名を地図上で描いてみると次の図(④-1)のようになる。特に集中している地区はないが、突端部と北側に多い。南部の沿海には全くない。南部は比較的遅く都市化した地区でマレー人の居住者が多い。更にマーケットの成立している地区を図にしてみると(④-2)図となる。併せて中国風(華南様式)の店舗の集中している地区を見てみると、檳城に於ける中華街の特徴を知ることができる。その内特に中華街の中核をなす地区を掲げてみると次のような地域がある。

①Jalan Kual KangsarとPenang RdからLebuh Kimberleyに至る地域、中国製家庭用品と雑貨、仏檀、祭檀類、装飾品、衣服、食堂（中華風）が集中している。Lebuh Kimberley⑥の古い街巷名はNoodle market Stで麺線街といっていた。中華料理店の通りであったといわれる。②Lebuh CampbellとLebuh KimberleyからJalan Kuala Kangsaに至る街区で、食品特に鮮魚、肉類、野菜が販売されている。露天、屋台もあって朝夕食がとれるようになっている。③Lebuh Carnarvon とPenang RdからLebuh Campbellにかけての一帯、Penangの中心マーケット街といわれる。皮革商品、宝石類、装飾品。中華料理店などが、軒を並べている。⑦Lebuh Campbellは中国式古称で、「新街」という。植民社会の中で中国人が宝石販売などをして経済的地位を高めた出発地点といわれる。④Lebuh AcheenとLebuh Carnarvonが交差する一帯、Lebuh Acheenには中国風屋台料理店が集中している。 Lebuh

図(④-1)　中国語原名街巷

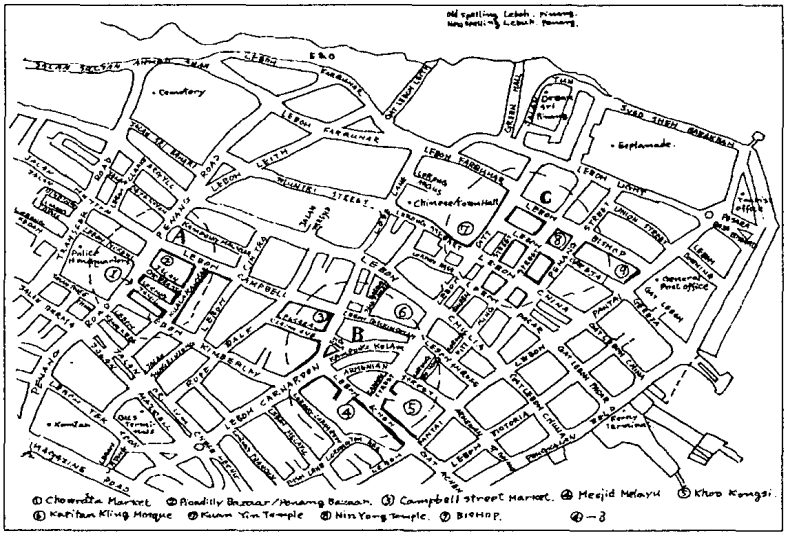


図(④-2)　マーケット分布



Carnarvonは中国書籍、文具、家庭用品などの販売店が多い。中国式街巷名を「石材街」と呼称している。⑧マレー人は「墓街」といっている。墓石になる石材があった街といわれている。⑤Cannon SquareとKhoo Kongsiの一帯、Cannon SquareはCannon Stの支路で小巷である。khoo kongsiのためにできた入口路である。観音寺は福建人の建立したものである。周囲は華南式住居形式地区でもある。⑥Kuan Yin Temple とKhoo Kongsiを経てLebuh Pittまでの街区、Cannon StにはYap KongsiとTuapeh Kong Templeがある。1867年の建立である。中国名では「偉大なる観音広場」の通りと呼んでいる。⑨近くのArmenian StにはKongsiがある。Pitt Stは漢方薬店が多い。Kuan Yin Temple は慈悲と戦争の神で、婦人と子供の守護神と称されている。中国風にはNan Yangと称している。⑧Lebuh BishopとLebuh Pasarを経てKings Stまでの一帯、Kings StにはNin Yong Temple とTuapeh Kong Templeがある。古く広東出身者が多く居住していた地区でもある。⑨Lebuh Bisopは古い商業区で、開拓の当初は「木造街」といい、木で造った家屋が並んでいたといわれる。後には「豆腐街」と呼ばれるようになっる。

以上の９地区には主として中国人の店舗や市場の集中していた地区である。これを図化すると(④-3)の如くなる。歴史的な成立過程からいうとＣ，Ｂ，Ａの順序である。檳城としての都市の中核を形成している地区である。この他にも中国人の集居はあるが、商業地区としてはＡ，Ｂ，Ｃがもっとも充鎮している。



(④-3)　　中国風店舗集中図

檳城の街巷名は既に

述べた如く英語、マレー語、インド系語、アラビア語等で形成されているが、居住する中国人は独自の街巷名を付加して呼称しいいた。その主なものを列記しておくと次のようになる。

(1)Pengkalad Weld 海**乾**路、(2)Lebuh Chulia 吉霊街、(3)Chulia St 牛干冬⑩衛、(4)Lebuh Carnavon 沓田仔、(5)Jalan Macalister 檳城中路、中路、中路頭（交差点）、(6)Lebuh Pantai(Beach St)中街、打鉄街、(7)Lebuh Kimberley(Kimberist)汕頭街、(8)Lorong Amoy 厦門街、(9)Jalan Anson 安順路、(10)Jalan Brickkilln 風車路、(11)Jalan Jelutong 日落洞路、(12)Jalan Pahang 彭亨路、(13)Pahang Rd 直落巴巷、(14)Lorong Perak **吡叻**律街、(15)Lorong Abu Siti(Aboo Sitte Canal)三星巷、(16)Jalan Siam(Siam Rd)**暹**律路、(17)Jalan Kek Chuan(Kek Chuan Rd)克全律街、(18)Lorong Pulau Tikus 浮羅池滑街、(19)Jalan Sultan Ahmad Shoh 蘇丹阿末莎路、(20)Jalan C,Y,Choy 崔耀戈路、(21) Lebuh Presgrave(Peresgrav st.)三条路、(22)Jalan Pangkok 邦咯律、(23)Lebuh Farauhar 華蓋街、(24)Jalan Trengganu 丁加奴律、(25)Lebuh Malacca 馬六甲街、(26)Lebuh Victoria 三角田路、(27)Got ⑪Lebuh Macallum 五条路海**乾**塡、(28)Lebuh Melaya ⑫台牛後、(29)Jalan Sungei 新港、(30)Jalan Sungei Pinang 檳城新港、(31)Lebuh Penang 檳榔律・庇能律、(32)Lebuh Cintra 日本街、日本横街、(33)Jalan Maxwell 港仔**墩**、(34)、Jalan Argyll 鴨家律、(35)Lorong Prangin 港仔**乾**門、(36)Lebuh Cina 大街、(37)Lintang Market 馬吉街、(38)Jalan Taylor ⑬太羅路、(39)Penang Hill 升旗山、西山、(40)Jalan Relau Bayan Lepas 峇六拝什、(41)Jalan Masjid Negeri(Green Lane)青草路、(42)Brick Kiln Rd 八条路、(43)Jalan Kampung 甘榜比**桑**、(44)Weld Quay 海**乾**碼頭、(45)Jalan P,Ramlee 関打虎、(46)Jalan Pantai 北海班、(47)Batu Ferringhi 峇都丁宣、(48)Jalan Dr Lim Chwee Leong 林萃竜医生路、(49)Lebuh Pitt 椰脚街、(50)Pengkal an Weld 海**乾**路、(51)Chulia St Chaut 柴路街、

(52)Chowrasta Market 中国市場、(53)Beach Rd 美芝路、(54)Sungei Nibong雙溪尼望、(55)Gertak Sanggul 美湖、(56)Balik Pulau 巴力布労、(59)Genting 仁丁等、(60)Jalan Burma 緬甸通、(61)Taihing Rd 太平⑯通、(62)Magazine Rd 土庫頭⑰條路等がある。中国人の出身地⑱によって多少の差があるが、檳城の市区の全てに呼称ある。従って街巷名をマレー語に改名となると居住民は反対運動を起こすことになる。

最近の例では檳城の療養院後にある蘇格路をGeorge Town 市長の拉馬那丹を記念し拉馬那丹路と改名した。住民は新路名に反対し、路牌をこわしたり、指示標を黒塗りする事件があった。反対の理由は蘇格路は高級住宅地のイメージがあったしAngzana 花やBougaln Villeaの印象が強く故敦胡申市長の雅号から付けられたものである。古くは亜依拉惹路などといった。改名となると身分証明書は勿論看板や商標までも改めなければならなくなる。檳城の路名委員会によると街巷名は社会的貢献のあったマレー人（本地人）を中心してその人を記念する意味で改名していると述べられている。街巷名そのものに民族的な行政問題が持ち込まれている。

註

① マレーシアと中国系居住民との関係を少し溯ってみることにする。1909年～1911年、マラッカ州の天地会系の秘密結社がマレー農民から土地略奪を行ったと伝えられる。1912年、秘密結社同盟会は他四結社と組んで国民党をつくる。この頃孫文が共和制政府を樹立した。清朝が倒れて、マラヤの華僑資金は軍部へ流出して、大陸との結びつき強めようとしたととられている。1913年、マレーシアはBumi Putras政策をとりはじめる。マレーシアにいる中国人はNon Bumi Putrasとなる。このBumi Putrasとはマラヤ保留権条令という。マレーシア生まれのマレー人でないと田畑の所有や耕作ができない。他民族は教育も受けられない。地方の州評議会には中国人の代表権も認められなかった。その後差別撤廃を約束するので中国人は歓迎するが、マレーのイスラム教指導者は「マレー人を土民扱いとして、マレー文化そのものは博物館にあって現実的でないと批評する他民族と同居は許されないなどと」いって

差別撤廃に強行に反対した。1914年、英国の植民地政府は苦力の契約制とクレジットチケット制を廃止して、中国人をマレー人の移民として扱うようにする。しかし、バンコクの旅行小冊には、華僑は東洋のユダヤ人であると書き込んだりする差別がつづいていた。

1916年、孫文の後継者としての蔣介石が上海の青幇同盟へ加入し、麻薬の密売組織と手をつなぎ東南アジアへの進出を試みたといわれ。1918～38年、国共双軍が争いの結果１５０万人の中国人がタイへ脱出したいといわれる。1920年になると中国人が急速に東南アジアへ流出する、特にマニラ、バンコク、クアランプールが中国人の３大集積地といわれていた。1922年の発表によると（中国政府）８００万人の中国人が海外へ流出したという。1925マレー半島にあった国民党の支部が閉鎖されている。翌27年から２～３年更に中国人が増加して３５９，２６２人の中国人が定住していると発表している。1928年まで国民党マライのオランダ領東インドの華僑から、２１億ドルの戦争資金が拠出させられている。1930年まで東南アジアの苦力中国人は約２００万流出したと発表される。この年から英はマレーシアの国民党の支部活動の禁止令を解除したが、大陸では中国共産党が抬頭はじめている。マレー半島の人口の５０％が中国系で、タイの人口の１０％は中国系であるといわれたが、この頃からゴムやスズの生産が頭打ちとなり、中国人のマレー半島への移住を禁止している。1931～33年、５０万の中国人がマレー半島から大陸へ送還されている。費用は英政府が出している。日本はこの頃満州を併合はじめている。タイでは秘密結社人民党が排華運動でクーデター起し成功する。タイでは、中国人は第２級市民へ格下げになっている。1937～45年は日中戦争、1938年、タイのピブンソングラム将軍、タイの中国人数百人を国外へ追放する。居住中国人へは外国人税と収入税、商店には店舗税をかけている。1939年、ピンブ・ソングラムによる排華運動開始される。1940年、中国計の人々がバタビア（ジャカルタ）で、西スンダ系住民によって約１万人虐殺されている。1941～42年、日本が東南アジアへ侵略開始。華僑を弾圧する。特にシンガポールは２万人の中国人を有罪としている。マラヤでは国民党と共産党を対決させ反共活動を開始する。共産党を構成するメンバーの多くは中国人であった。1945年まで日中戦争は続いた。1946年にはペナンに「アンビン会」という中国系の慈善団体がつくられ４万人の港湾労働者とトラック運転手とゴム農園労働者が加入する。はじめ警察の暴力団の検挙に協力したといわれるが、のちに警察と衝突しアンビン会が弾圧され構成員が瘧殺される。アンビン会は、ペナンを通過する船の物資へ税をかけて暴力団化する。戦後

はマレー最大の秘密結社といわれるようになる。マラヤ連合政府の憲法を英国がつくるが、この時はマレー人と中国人は平等であるとする。マレー人は反発して統一マヤラ国民組織をつくり中国人の殺害に乗り出す。英国より独立すると、この傾向より強くなる。マラヤにいた5千人の中国人共産党員は半ば強制的に秘密結社へ加入させられた。ペナンでは消防団員によって構成された「まさかり団」、シンガポールでは女性によるテロリスト集団「赤い蝶」や「黒い原爆」などの集団が知られている。こうして現地のマレー人との格差がますます激しくなっていく。1948年、英の植民地政府が反共中国人の村を襲い中国人農民を虐殺する。マラヤ連邦に憲法ができて9人の土候によって実権が握られる。実際には名目的統治者ではあったが、マレーのマレー人による国家が生まれる。人口に比例して議員定数をふりわけたので、マレー人側は有利となった。マラヤ生まれの中国人は父も母もマラヤ生まれでないとマラヤ市民になれななかった。こうしてマレー人対中国人の対立が続き小さな紛争は絶えることがなかったのである。

② Lebuh Amoy は古くAmoy Rd といわれた。厦門は福建省南部の港湾都市である。厦門は中国語でXiamenという。福州とともに古くから海上交通の拠点となっている。華僑の故郷として知られる。

③ Jalan Cina は文字通り、中国人通りである。海岸近くにGot Lebuh China がある。中国という時はBenue Cihna を用いる。マレー人はCinaと表記し、中国人はChina と表記する。マレー人は発音からKinaともいい、Kina balu は中国人の未亡人のいる処としてる。

④ Jalan Butu gatong は広東人のいる石山通りである。Butuは石であるが崖のある海岸地をいうことが多い。

⑤ Hong Kong, Hong Kong は英語である。中国語ではXianggang となっている。なぜ香港が Hong Kongと発音するかについて諸説があるものの、中国語の広東語の発音が英国に伝わって Hong Kongと書かれたというのが有力である。従って中国語が原音と考えられる。広東語ではGuongdung と発音する。藤島範孝「香港の街巷名について」駒大教養部紀要第25号 1990.3.岩見沢市.

⑥ Lebuh Kimberley は古くNoodle Market といわれていた。Kimberley は南アフリカ共和国の都市名であるが、ここで働いてたい労働者が移民して来たとも伝えられている。

⑦ 1880年頃には中国人が命名して新街にして、のち英語のNew Stが用いられたといわれる。中国人が皮革製品を販売している。鞄、靴、バックといったものが多い。買手はマレー人が多い。

⑧ Lebuh Acheenは古くStriking Stone Stと中国人が呼んでいた。墓石を切り出す石切場があったといわれる。出身地で墓園形式が異なり。墓石もさまざまであった。Lebuh Carnavanは別名Malay Cemete Stといいマレー人の専用墓地だったと伝えられる。現在は中国語系の書店が並んでいる。

⑨ この他に南部に蛇寺があってKuil ularといい、1850年に建立された儒教の寺がある。僧侶のChorsoonがKongを祀ったところとして知られている。

⑩ Chulia Stは薬局の看板にはマレー語表記と中国語表記が書かれている。

⑪ Lebuh Victoriaはマレー語と英語の街巷名である。居住している人は中国人が多く、中国人の屋台が多い。牛肉麺売りがいた。屋台のことをGoo Back KwayTeowというが、中国人は専ら「屋台通り」といっていた。

⑫ 最近、檳城の首席部長の林蒼祐が提唱して五条路の再開発をすすめている。五条路から雙渓檳榔一帯に軽工業を誘置するという計画である。

⑬ マレー語でMarketのことをPekan という。Pasrは固定と半固定のものがある。Pasaraとも表記する。Tokoはインドネシアでは半固定である。Babaでは「土庫」と表記する。移動商店のことである。固定するとPasaraというMarket（馬吉）であるという。固定は２階建ての家屋が多く食品や雑貨、日用品を扱う、時には卸売で野菜の大量売りしたり、鶏を一羽づつ売ったりする。都市のPasar は中国人が中心である。中国人は独立店をTokoといって、Tokoを囲んで食品Pasar が立地する。商品の運搬はオートバイ、小型トラック、トライショーが主である。高級品を扱うとGrael Heroといっている。ここのPasar はヒンドー語よりきたという。ボランティアで慈善パサールをPasara-malとかPasardermaというDiakartaの固定市をPasar Graelといっている。闇市はPasargela.夜市をPasar malamと称している。Chowrasta Marketなどは中国人専用市場である。

⑭ 最近升旗山の開発に対して反対運動が起きている。ペナンで最も高い山である。升旗山の周辺には水上公園、遊楽園をつくる計画がある。空中ｹｰﾌﾞﾙは既にあるが、更に大規模にしたいとしているが、植物の生態系を破壊するといわれている。州政府も環境保護の立場から慎重に扱いをしたいとしている。

⑮ Sune(河)の表現の古い表記かSungei或いはSungaiでSgと略して書いている。ペナンにはPeng Kalanがある。河から吐出した土砂で埋立てられて陸化した通りの名である。河口の埋立地でSandilandといわれる。古い表現ではSandi

landsとなっている。郊外にはHili Sungei Pinangという道がある。河の流れという意味であるが、ペナン河上流の河の上へ通路ができたものである。

⑯ Jaian Burma(Burmah). Burmaは緬甸である。マレー語ではPeguという。Burmahの名の付く道路は多い。1940年以前にはBurmah CloseやBurmah Crescent. Burmah Lane. Burmah Rdなどがあった。それが今はSolok(slk)BurmahとLengkok Burmahとなっている。Burmah Laneは途中から海へ出ている。Solok Burmahは今も死胡である。Solok はSide-Valleyの意味である。

⑰ Taining Rd は今住宅地である。1900年以降の開発になる郊外区である。このTaiping はペラグ州の町の「太平」からきている。1885年にマレーシア最初の鉄道が太平に通じている。タイピンからポーウエルド(Port Wold) までの起点である。1848年まで太平はラルートといわれた。ロンジァファールというマレー人が錫鉱を発見し、労働者として中国人が入植し、1870年には4万人の人口の街となっている。この町は二つの結社の勢力争いで分裂して錫鉱山が廃山となり、1874年に英政府が紛争収拾に乗り出し、一応の解決をみている。「太平」は永遠の平和の町という中国名であったが、錫の再開発は今も遅れがちである。ペナンにはこの町から来た中国人が居住して名が付いたといわれている。1948.8のクーデタに参画した共産主義者の社会復帰のための刑務所がある。第2次対戦中Penjaraといって日本軍が利用していた施設である。

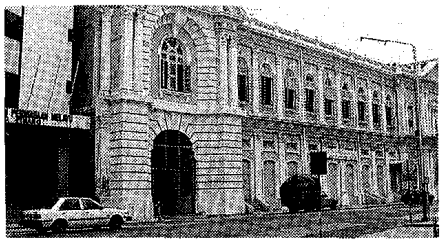
⑱ 今日はJalan magazinといっている、シヤングリラホテルの前の通りである。

古くは倉庫通りといい、「土庫」といっていた。都市計画にて再開発されている。写真のMagazine RdにはPenangを旧表記のPinangを用いている。檳島が槟島と略字体を用いている。旧表記と略字が混合して用いられているのが、植民地であった時代を思わせる。

5

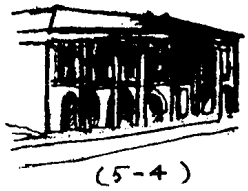
中国人が居住し街巷が形成されると、街巷を挟んで中国様式の建築物が造作されるのであるが、檳城の如く都市成立の基盤が英国植民地都市であった処は最初は当然英国風建築物が優先する。今日英国風建築物の原型が全て残存する訳ではないが、植民地時代の英人役人や商人が居住して家屋がLebuh Light に面して残っている。（写真5-1)。又、東インド会社関係の事務所や倉庫といったものがUnion St に残っている。（写真5-2)。ただ、直ちに英国風といっても建築様式からみると、インド植民地時代の名残りがあってインド様式との折衷的なものも少くない。実際は東インド会社様式建築物としてた方がいいのかも知れない。1950年代の檳城の主な建築物を見てみると、最初に欧風を持込んだものの、やがては切妻様式といった中国風が加味されるようになる。（図5-3. 5-4. 5-5 参照)1850年頃から東南アジアの植民地都市に出現するのはドンラムアー式の商業店舗である。建築材料は石材を用い、一部木材を組み合わせる方法である。様式の基礎は欧風なのであるが、

5-1 Lebuh Liht(旧役所)



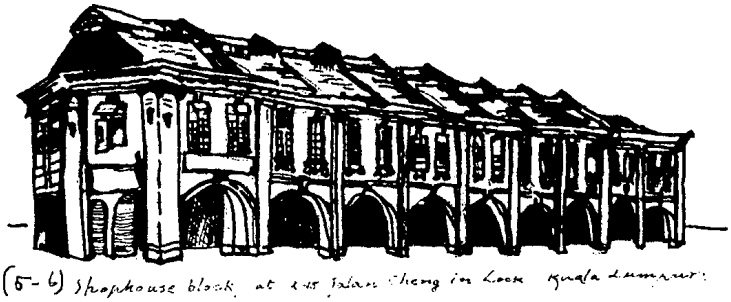
5-2 Union STREET(旧東インド会社)

borough Building.
18 to 年代の Penang.
(5-3)



(5-4)
Tan Kim Seang's godown.

(5-5)
Yeo Kim Soore's Warehouse.



(5-6) Shophouse block at 245 Jalan Cheng in Kuala Lumpur.

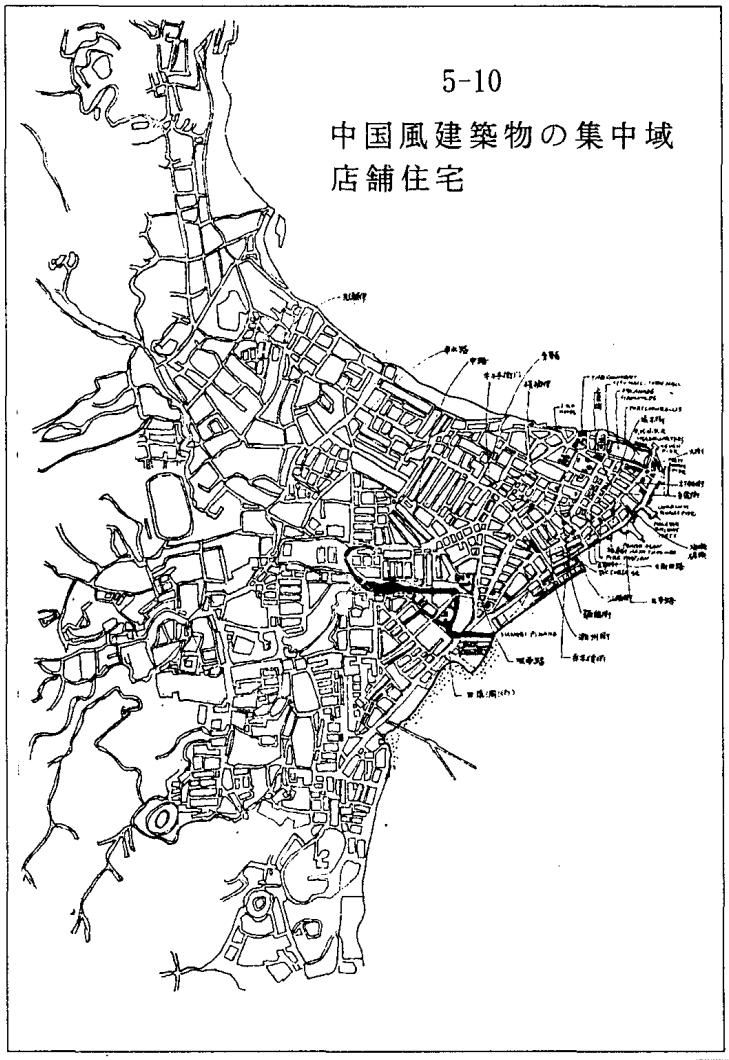
屋根や騎楼（過街楼）に中国風式特にリンラム（嶺南）風が取り入れられている。都市のこうした建築用式は植民地の景観でもあったが、窓や支柱の円形はギリシア風で東インド会社の様式ともいえる。インドで醸成された欧風建築様式が東南アジアへ至って華南様式と結合したともいえる。

ところで、マレー式建築は当時の様式は、今日とほぼ同様の高床式といわれている。マレー人は生活の主態が農業であったこともあって、果樹を家屋の周囲に植え直射日光をさける床下の生活で高床式が一般である。一部水上生活をするマレー人は中国式の間取りを取り入れて杭上式の家屋に起居するが、本質的には高床式である。水上生活者の中には商業活動を営むものもあるが、今日では商人の多くは中国系住民である。これらの事からマレー人の住居は農業にしろ、漁業にしろ自給自足経済体制であったので、建築様式には殆んど関心がなかったものと見る。檳城の水上生活者の住家などを見ても都市的機能や商品の流通の構造をもっていない。従って都市形成にはマレー式建築物では参加することができなかったのである

5-7 マレーの高床式住宅

5-9 檳城の水上生活

中国人の最初の移住が契約労働者であったり、下級労働者であったりしたが、やがて住居を構えると中華街と呼称される社会的構造の上に商業店舗を造成したのである。中国人は商業活動よって都市成形に参画し、植民地といった借用地へ特有の中華街を成立させることに成功したのである。檳城において、所謂中心街を形成する繁華街は中国人の店舗によつて占められている。植民都市を造成したのは英国であるが、都市を形成したのは中国社会であるともいえる。檳城の都市尖端部の殆んどに中国風建築物がある。これが亦、檳城の中核を形成したともいえるのである。（5-10図参照）



中華街を構成する店舗形式は華南風（リンラム）が採り入れられ、店舗と店舗が街巷を挟んで林立するとこになる。店舗の前は騎楼で、その先が舗道となる。時には街巷の上に店舗が互いに重なり洞窟のようになる処も出現する。多くの中国人は店舗2階に起居するといった所謂「下駄ばき」形式をとる。（5-11）

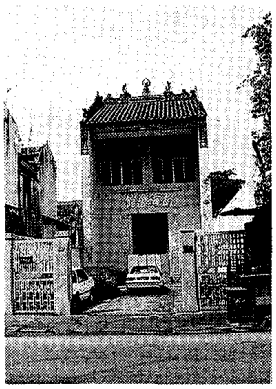
一部の移住民は居住区を他地区へ持ち、住宅と店舗を分離させた様式をとり入れている。檳城では欧風建築の縁辺にリンラム式住宅が立地している。例えば今日オールドマンションと呼称されている曲江会館（5-12）は檳城の植民地化とほぼ同年代に建築されたとみなされているが、典型的リンムラ様式である。曲江とは北江の支流名で、韶関市である。リンムラの地主層の建築物の一般的様式と思っていいだろう。斯様な大型のリンムラ様式をみると同郷集団や宗族集団の絆の深さを知る事ができるのである。檳城では後には出身地別の集合場所である会館

5-11リンラム形式

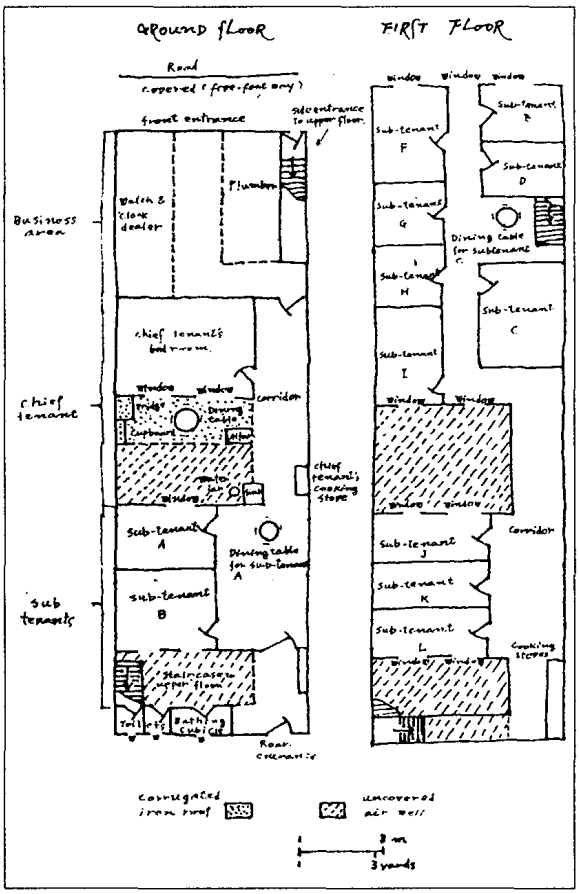
5-12　曲江会館

5-13 潮州会館

建築が出現する。写真の(5-13)の如く同郷会館の建築様式は儒教寺院の如き門を持っている。最近建築され多少近代化されてはいたが、会館建築には常に信仰的要素を加味したものになっている。(5-14)例も同じように同郷の会館である。先に指摘した如く中華街の店舗は下駄ばき形式で二階建である。一階(Ground floor)は一般に居住区としたものが多い。中華街構成する店舗を機能的に考えると生活し乍ら商品を販売する場所ということになる。かつ、同形式の長屋であると隣へ同族、同郷人を棲むわけるといった密居形式をとる。檳城では中国人の70％は中国人の集中域である中華街で生活をしている。これが檳城の都市核でもある。情報流通、防衛といった都市の機能も果している。今この内部構造特に間取りからみると次の図のようになる。(5-15)中華街を構成する店舗は隣とは棟を並べ卯立の壁で仕切られている。店舗が10軒並ぶと十間厝(Shijian-li)といった呼称が生まれたりする。(5-16)檳城のCarnavon Stといわれていたがこれである。星州のQueens(蓁因街)も店舗が並び別名をTwelven-House Stと呼ばれている。原名はShibajianhouやShierjianから来たものといわれている。もともと12間道路であったのである。檳城



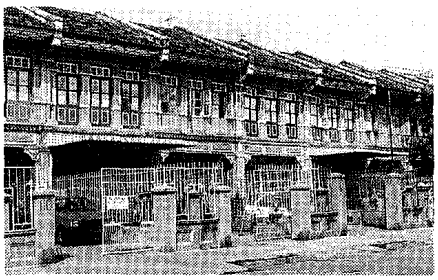
5-14 南海会館



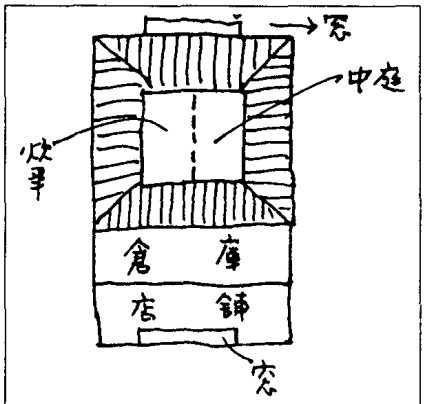
5-15 リンラム風店舗の間取り

5-16 Carnavon st(10間通り)

のChulia LaneもSibajianからShigijianになってになって17間通りである。Cheang Hong LimStも古くはSt of eight small Houseといい中国人は18間仔通りといっている。店舗の規模が少し小型であったことが知れる。Circular Rdの方もBack of the thirteen shopsという別名があったので13間の後通りということであった。Boat QuayはThe back of the eighteen houseでShibajianhouといわれ18間通りである。Jalan Sulfan通りもTwenty Houseの通称があったので20間通りということになる。店舗が数軒並ぶというのは中華街街港の枠組であると同時に骨組みと思われる。景観かに見る中華街は同型の長屋の如き店舗をいっている。この場の「間」は軒である。独立家屋に「軒」を用いるが、字義からは窓があり廊下のある家を「軒」としている。中華街の特徴は一つは騎楼をもつことである。店舗の商品売場が直ちに舗道へ拡げていないことである。食料品や屋台は別である騎楼の下の空間は顧客への配慮と坐席の機能を果している。階下で商業を営んでいない純居住区でも、この形式が踏襲されている。玄関口に小庭園を花壇としてる処もある。最近は車庫に用いている。(5-17)考えて見るとマレーの高床式の住居と同形態ということにもなる。猶、「間」は軒といったが勿論仕切りのある1部屋を1間ともいう。部屋数を数える時に1間・2間ともいっている。


5-17 小庭園をもつ住宅

これら集合家屋を屋上から見ると互いに屋根が重なっている。地上からは単なる桝のように見えるが、一旦中へ入ると中庭を中心として屋根を四方へ廻してある。華北の中堂形式と似ている。(5-18)(5-18)中庭を囲むように3～4間がある。窓は店舗側の2階と居間2階にあって隣接する両側にはない。直射日光を避け盗難に対する配慮といわれている。中庭には炊



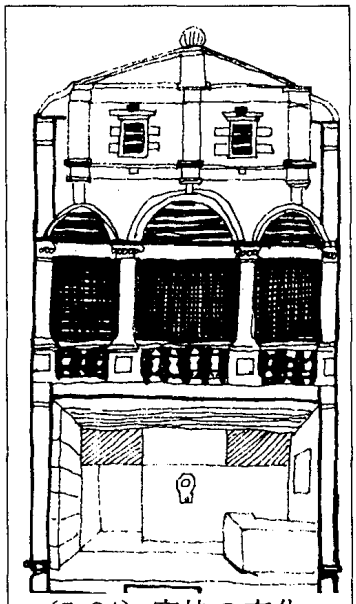
(5-18) 間取り

(5-19)店舗兼住宅を上からみる

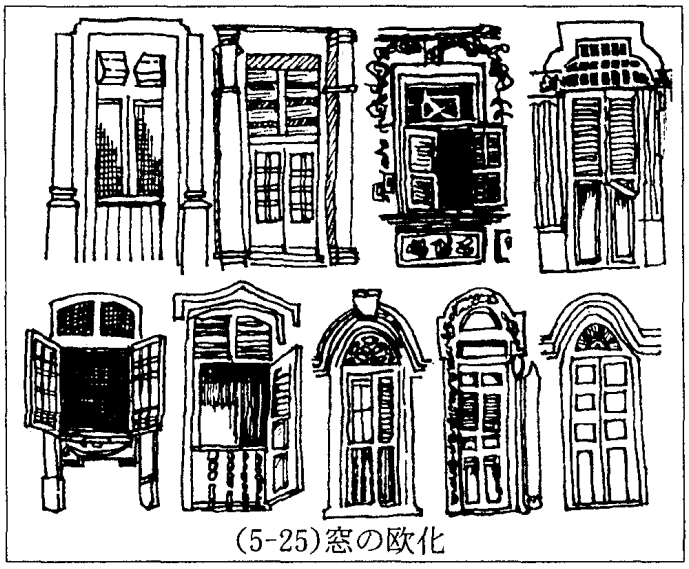
(5-20)看板のある中華街

事と洗濯場所が確保されている。その中間に食卓を置いて食事をすることもある。店舗側の１階は所謂Corridor-typeとなっていて、店先がTerraceとなっている。店の前は停仔脚と同型式の騎楼を用いている。騎楼は華南一様の建築様式である。ただ自家用車が多くなると、駐車場に使用されたりして店舗の機能が失われるため、騎楼を排除しようという運動が行われたりしている。店舗の車道に面した処に看板をかがける。かっては車道へ看板吊るしたものが多かった。建築上の美観などには拘わらず「面子」を重んじ、宗族名や中国古名、店主名、職種名など上から下へ吊るしたものがあつた。漢字を縦に並べることが多く、横書きの例は少ない。(5-20)店舗形式も変化し開拓当初はリンラム建築様式を用いて煉瓦壁で水平梁を用いた。窓枠も特有リンラム風であつたものが、欧風が採り入れられて換気装置を考えたものに変わっている。電灯が入ったのも大きな変化であった。こうした店舗の入口にカウンターがあって、常に店主が坐っているのが中華街特有の風景でもあった。(5-21)(5-22)窓の方は硝子を用いるようになって窓枠が急変した。店

(5-21)(5-22) 欧風とり入れた店舗

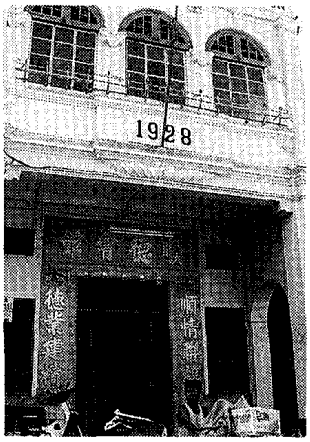

(5-24) 窓枠の変化

舗の壁もモルタルへ変化するのである。実際には多様であるが一定の規範を見出すこともできる。(5-24)特に、窓枠と構造の変化は顕著である。硝子を用いるようになって、四方の窓枠から円くなって角がれたものが多くなり、飾り小屋根が付くものなどが出現する。生活の余裕や店舗経営の発展を示すものなのである、欧風の強い影響を見過す訳にいかぬ。窓枠の変化は同時に中華街の景観の変化であったのである。今日の中華街の構成はリンラム建築様式と外観に欧風から成立していると見ることができる(5-25)。欧風は先ず2階部分の窓枠にて拝り入れられ支柱の飾りへと移るのである。然し、1階の店舗の部分は頑固にリンラム風である。これは店舗の形式というよりは宗族構造が変化しないことによるもの思われた。


(5-25)窓の欧化

(5-26)1924年の住宅

檳城では1920年より同30年代に特に欧風の窓枠が採り入れられた(5-26)の所謂洋風館方式となり騎楼がなく入口が階段になるのも特徴である。寺院さえ中国風の飾建築が消えている。これは寺院のみでなく会館にも適用され一般の店舗の形式と変わりなくなっている。もっとも会館形式に欧風を取り入れたが騎楼はその侭残っている。亦、角地の建築物が角をとって建てられるというのもこの時代の特



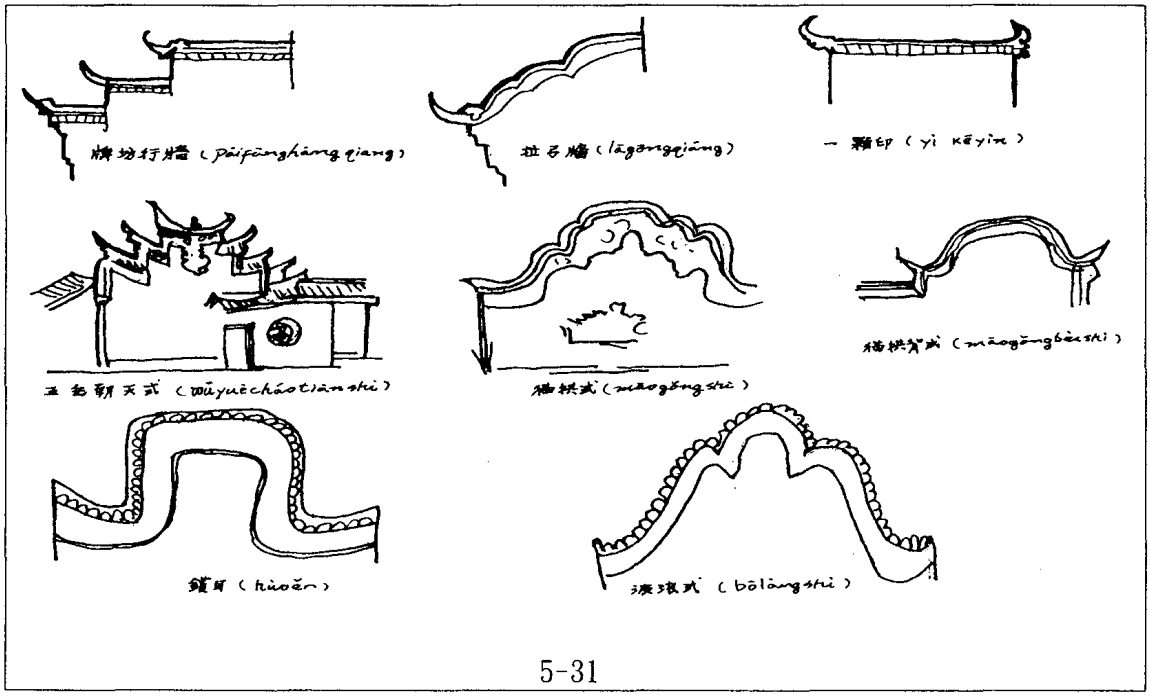
(5-27)1928年会館建築

徴である。（5-27, 5-28）1930年代後半から欧風が一層強くなって従来のリンラム風建築様式が衰退する（5-29, 5-30）

中華街建築物のもう一つの特徴は、中華街の中央とおぼしき一角に信仰の対象としての寺院や廟を設けることである。中華街の店舗や住宅が欧風化を採り入れて変化していく中で、寺院や廟、堂などという建築物はリンラム様式の侭である。(5-30)廟は集会場や葬儀に使用される。堂では会合、相談、相互扶助などを行っている。寺院は勿論信仰の対象となるのであるが、廟や堂と同じ働きを持っているものもある。これらの各れもが華南の寺院や廟を踏襲している。中華街の象徴ともなっている。特徴は屋根型にある檳城などで形成を追求してみると、8つの形式に区分されることが解った。（5-31図参照）

(5-28)1934年建築

福建出身者がつくる信仰の対象には媽祖が多い。媽



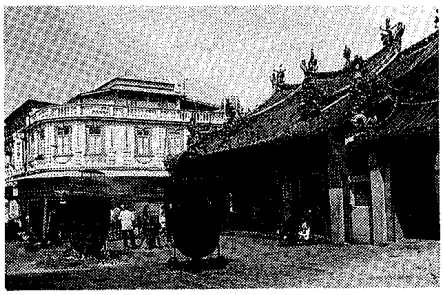
5-31

祖とは北宋代の民間女性で実名を林默默という実在の人物である。２８才で没している。福建省の莆田湄洲島生まれである。1987年農暦９月９日莆田で「天后宮湄洲祖廟」媽祖昇天千年祭が開かれた。1990年の４月莆田にて「媽祖研究」の国際学術会議が催されている。媽祖は平素から海難救助にあたり、湄洲島の人から「通霊神女」といわれた。歴代の帝王から褒封をいただき廟の建立が行われた。南宋代には「順済林婦人廟」ともいわれた。清代の初めにかけて「天妃宮」（廟）といわれた。清の康熙年間に台湾を統一してからは「天后宮」と昇格している。海難の女神として沿海民や海外の華僑に深く崇やまれている。台湾では莆田の分霊として「北港朝天宮」「鹿港奉天宮」「大甲鎮瀾宮」等がある。この天后廟の屋根の構造及装飾が他の寺院や所謂「堂」等の屋根の構造に強く影響しているとみる。中華街の店舗や住宅が欧風化を採り入れ華南建築との折衷建築になっても廟、寺院、集会所としての堂などの建築構造は華南から移入した侭変化していない。中華街いそのものが東南アジアでは消滅の危機にあるといわれているが、廟や寺院建築が有る限り直ちに後退するとは思われないのである。

(5-29)騎楼(角地)

(5-30)騎楼

檳城ではCannon TempleやKuan in Yam Temple, Kek Lok Si Temple, Goddes of Mercy Temple等にリンラム風寺院建築を見ることができる。(5-32)猶「堂」は集会所なのであるが、屋々寺院建築様式に似せることが多い。「堂」は台山①出身者が寧陽②という紐帯をつくり、新会と鶴③山の出身者が聯成という同郷組織をつくり、集合する広場


(5-32)寺　院

(5-33)宗族の堂

をいう。「堂」は僑領がいて運営されている。檳城では大原の王氏の宗族の堂（5-33）や馬氏扶風堂(Mall si foo foong tong)などが知られている。最近は欧風建築様式の「堂」も出現しているが、多くは寺院様式である。こうした寺院様式の建築構造については機会を別にしたいものと考えるが。中華街を構成する象徴的建造物であることを認識を新たにしている。

註

①Taishan は珠江デルタの西南部に位置する。広東省に属している。1914年に県城の北に３つある台地から台山県と命名している。水稲や甘蔗の栽培地である。古くから国外へ移民を出している。華僑の故郷の１つである。

②Xinhui　広東省に属し、珠江デルタの西部、潭江の下流である。水稲と甘蔗の栽培地である。古くから淡水養殖を行っている。「小鳥天堂」という名勝がある。華僑の故郷の１つである。

③Heshan　珠江デルタの西部、広州市の南、水陸交通の要地である。水稲と茶の栽培地。古くから華僑を出している。広東省に属している。

④Taiyuan 山西省である。太原盆地の北端に太原市がある。古く都がおかれた。漢族の他に満族やモンゴル族がいる。小麦と綿花の産地で紡績工場がある。石炭も近くで採れる。

（この「東南アジアに於ける中華街の研究」は平成２年駒沢大学学術研究助成（個人研究）による成果の一部である。）